つの価値観で働く人を「前ならへ」させようとしていました。『四日市・死の海と闘う』の著者田尻宗昭さんもその著の中（p. 99）で驚きを持って、企業への「忠誠心」がどのように作られていくかを端的に書いています。フツーに人間的感性を持って入社した若者を独身寮で、「公害のコの字でも口にすると、必ずそれが会社に通報される。…一定の見習い期間の間に、いわゆる現場のコースか、エリートコースかが、はっきり決まっちゃう。…上司に口答えすれば減点、あるいは公害問題を口に出せば要注意だ…詳細な勤務評定によって…当然ボーナスもガタッと違ってくる」と。

私も長く（１９年間）それらの企業の社宅がある校区（菱ケ丘・森が山）で教員をさせていただきました。田尻さんが批判的・象徴的に書く社宅の「徹底した身分差」には鈍感で感じていませんでした。それは私の相手が母親であり、かなりの高学歴で、とてもリベラルで、私が小中でずっと展開する教育実践と公害教育をトータルに見て、一度たりとも抗議をしてみえなかったからです。しかし、オヤジたちの世界は違ったのです。食事をするすぐ横に来て話を聞き入ったり、尾行したり、映画や演劇の公演の出入りをチェックしたり、ときには飲み屋に誘っておごったりと日常不断に懐柔工作、思想調査、行動監視は執拗かつ露骨・継続的に行われデータは累積されていったのです。それは採用段階から徹底されていたのは有名な話です。「オペレーター採用の基準は」の問いに「バイタリティ」「スポーツマン」「健康」「人物」などをあげ、決まって最後に「思想」と言ってはばかりませんでした。採用の際には家庭環境を中心に徹底した思想調査がなされました。そうした状況は教員世界もほぼ同じでした。

３．コンビナート企業の中で生きる

そうした極めて近代的な化学工場最前線にありながら前近代的な労使関係の中で生きた労働者。その悲喜交々と４０年経った人生としての総決算は単純ではありません。相手の立場を追求したが個人として攻撃はしなかったＹさん、退職後も反公害と労働者として内部から見て来た四日市公害の語り部をしてみえますが、あの時はスマンかったという人たちを恨む気持ちは感じられません。自分の生き方を通し、組合選挙で自分の主張すらできない環境で、爆発事故の時、工場の安全を訴えて闘った勇気。中部電力人権裁判では、家族ぐるみ慰安旅行からはずされ、賃金差別、不当配転にめげず２２年余の裁判で勝利和解を勝ち取った人たち…。

人は食べるためにだけ働くにあらず。自分の信じる思いに正直生きて、今感じるすがすがしい空気。いくら効率と「城内平和」のためを求めても、一人の人権（思想信条の自由）は消し去ることはできない、それは紛れもない事実です。